



年々遅くなる鳥の初見日。最も変化が大きかったツグミは約19日も遅くなりました。(真木広温さん撮影)

来るのは遅く



冬の渡り鳥

なっとくかがく

旅立ちはややく



秋に飛来し、春先に北の繁殖地に飛び立つ渡り鳥(冬鳥)の日本で滞在期間が1986年に比べて約1カ月も短くなっていることが、横浜市内での観察データを基に、東京都大の小畑洋美教授(保全生物学)が、突き止めました。

渡りの時期が温暖化により変化していることが分かった鳥(ツグミ)  
(真木広温さん撮影)



渡り鳥が日本に来る時期が遅く、旅立ちの時期は早くなっているため、地球温暖化と都市部のヒートアイランド現象の結果、横浜市の年間平均気温が約1度高くなっていることが、鳥の渡りに影響を与えたみたい。同じようなことが北海道や九州の渡り鳥でも見られているといわれ

## 温暖化影響 日本滞在1カ月短縮

ています。地球温暖化が渡り鳥の行動に影響を与えるとの報告は、欧州や米国ではありますが、日本での調査は少なく、温暖化の生き物への影響を知る上で貴重なデータとなりそうです。同市内の一横浜市民の森「では86年から、日本野鳥の会や市の職員などが鳥の観察を続けていて、記録から冬鳥が最初に見られた日(初見日)や最後に見られた日(終見日)などが分かっています。小畑教授が、ウンやアオジ、ツグミなど毎年飛来した6種類の冬鳥を調べた結果、86年から2008年までの間に、ほとんどの鳥の初見日が年々遅くなって、最も変化が大きいつぐみではこの間に約19日遅くなっています。逆に終見日は6種全てで早くなり、ジョウビタキでは36日も早まりました。この結果、6種平均で半年余りだった日本での滞在期間が29・7日短くなりました。小畑教授は「温暖化の影響は今後、さらに表れるとされます。渡りなどの生態の変化が他の生物や生態系に与える影響などを含めて、さらに詳しく研究が必要で、今後もついでに」

●この記事・写真等は共同通信社、静岡新聞社の許諾を得て転載しています。無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。